

水の哲学

レオナルド・ダ・ヴィンチ

「人間が地水風火から構成されているとすれば
この大地の肉体も同様だからだ」

レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）は中世イタリア・トスカナのアンキアーノ村で生まれた。父親は公証人で裕福な家庭だったという。姓のダ・ヴィンチはヴィンチの出身という意味で5歳のときから近隣のヴィンチ村に移り住んだ。

イタリアを中心とした最盛期のルネサンスを代表する「モナ・リザ」や「最後の晩餐」などの絵画で有名なダ・ヴィンチは彫刻や音楽の分野でも旺盛な創作活動を繰り広げた多彩な芸術家だった。しかもそれだけにとどまらず建築、土木、軍事、解剖学、天文学、数学など科学技術全般で独創的な才能を発揮した。その先駆的な研究は「画家は万能でなければ賞讃に値しない」とみずから語っているように「万能の天才」として後世に名を馳せている。

水の流れを科学的に考察

彼の広範囲に及ぶ研究は「レオナルド・ダ・ヴィンチ手稿」として膨大な数のノートに記録されている。ダ・ヴィンチを崇拜するマイクロソフト社長のビル・ゲイツも直筆のメモであるレスター手稿を所有しているそうだ。レスター手稿は水の流れの観察から始まり、地球、太陽、月の構造などを科学的に考察している。

ダ・ヴィンチは「水の運動と測定」という研究ノートをつくり、河川の改修にも技術者として携わるなど水の流れに多大な関心を示した。いわば流体力学や水理学の先駆者といっていいただろう。

水の動態を丹念にスケッチしたダ・ヴィンチは「水中に投げ込まれた石は数多くの波紋の中心となる。そして空気も同様に波紋で満ちている。その中心は空中に作られた音及び声である」という言葉を残している。

水から空気へと至るダ・ヴィンチの研究活動は大空を飛びたいという人類の夢の実現に注がれるようになった。彼は鳥が飛ぶ様子を詳細に観察し、現在のヘリコプターやハンググライダーに酷似した飛行機械を試作した。

彼は鳥の飛行の原理を「風は鳥の下に吹き込ん



でちょうどくさびのように、その上にある固体の下に吹き込んだだけ鳥を空の方へ持ち上げる」と説明している。

自然の象徴としての人体

表題の言葉は作家の杉浦民平が翻訳した『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』に収められている。

正確には「人間は古人より小世界と呼ばれた。というのは、ちょうど人間が地水風火から構成されているとすれば、この大地の肉体も同様だからだ」という文脈の一部だ。

これをわかりやすくいうと、人間の肉体は土や水や風や火で構成されている大地の肉体＝自然の象徴ということになる。その例証としてダ・ヴィンチは「人間が自分のうちに肉体の支柱で枠組みである骨を持っているとすれば、世界は大地の支柱である岩石を有する」、「血の池から人体中に分岐していく血管が出ているとすれば、同様に大洋は大地の肉体を限りない水脈で満たしている」というようなことを言っている。骨は岩石、血は水脈として対称的な関係に置かれている。

ダ・ヴィンチは数多くの動物や人体の解剖を通じて身体構造に熟知していた。そこから人間の存在というものが世界に対する小世界であり、大地の肉体＝自然と密接な関係にあることを確信したのである。

哲学的にいうと、これはダ・ヴィンチが唯物論的な立場に到達していたことを意味する。すなわち人間は自然から誕生したという近代科学的な世界観を抱いていたということだ。彼が書いた解剖



図はきわめて精巧であり、とくに工学的に表現されたものはロボットの設計図としても通用すると評価されている。

科学と芸術を具象化したモナ・リザ

人間と自然の一体性に関するダ・ヴィンチの考察は彼のライフワークとなった「モナ・リザ」の絵からも洞察することができる。

モナ・リザの背後にある風景は山上の湖あるいは海面と見做され、そこから二筋の河が流れている。これは道だという解釈もあるものの、ダ・ヴィンチがとりわけ水に強い関心を示していたことを考えると河の流れと見るのがより自然だろう。

ここであらためてダ・ヴィンチの手記を想起すると、人間の肉体は大地の肉体＝自然と同様の素材で構成されている。したがってモナ・リザで描かれた河の水脈は人間の血脈を象徴しており、頑丈そうな岩石は人間の骨格に対応している。水や土を背にして微笑んでいるモナ・リザとはたんなる謎の貴婦人ではなく自然と対称的な関係にある人間の象徴なのだ。

ダ・ヴィンチがみずからの自然科学的な世界観を投影してモナ・リザを描いたことは「自分の芸術を真に理解できるのは数学者だけである」という言葉からも如実に察することができる。彼は科学と芸術の統一した姿を極限まで追究し、あらゆるジャンルで作品としての具象化を試みた。そのもっともポピュラーな結晶がモナ・リザだったといっていいただろう。

（高倉）

